特集 いま地域がおもしろい

地域通貨を手段として住民が地域を変える

十川　泰成
地域通貨おうみ委員会幹事

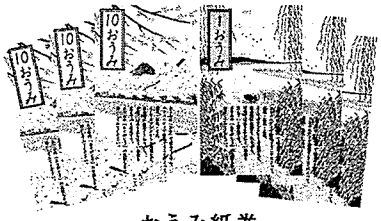
地域通貨が注目される背景

今、国が発行する日本円や米ドルやユーロなどの「法定通貨」とは違い、市民が独自に発行し、物やサービスを特定の地域やグループなどの中で循環させることによって、市場では成り立ちにくい価値（相互扶助やボランティア活動など）を支えていくための手段として地域通貨が注目されるようになっている。

今日人々は、社会生活に必要な物やサービスを得るために家族さらに地域社会に頼らないで、市場だけに頼らないといけなくなっている。生活をしていく上で何か困ったことがあっても、自分で解決することもできず、また親しい人に相談しても解決することができず、市場で物やサービスを買うことで解決することを強いられるようになっている。つまり、地域における相互扶助の機能は商品化されてしまっている。本来、貨幣の役割は人と人との関係を円滑するためであったが、逆に人と人の絆を断ち切るものとなっている。そこで地域の役割を改めて見直し住民自ら地域を変えていこうとする意識が高まり、再び人と人との絆を結びつけ、地域支えあいのしくみを作り直していきたいということで、日本全国各地で地域通貨を手段とした新たな試みが生まれてきている。

地域通貨おうみとは？

地域通貨おうみは、1999年5月に滋賀県草津市で誕生した新しい「地域支え合いのしくみ」である。おうみは、1おうみ＝100円程度のコミュニティ活動への寄付に応じて発行される紙券である。「有機栽培された野菜を譲ってください」「その代わり時間がある時に、農作業のお手伝いをします。」「お年よりの方の代わりに買い物へ行きます」「その代わり草津の歴史や文化を教えてください」「お袋の味を分けてください」「その代わりパソコンを教えます」といった多様な使い方ができ、お互いの信頼関係の下で、「ありがとう」の気持ちを表す。このようにして、草津で住んでいる人々が相互扶助しあい、自らが抱えている問題を解決していこうとする道具になることを目指している。



おうみ紙券

地域通貨おうみの目的とその実現に向けて

まずは地域通貨おうみの目的として4点挙げ、その実現のための具体的なアプローチについて述べる。

第一に、途絶えがちな地域内の人と人とのコミュニケーションの場をつくり、相互扶助をしながら、互いの能力と技能を生かすことである。今では隣の人が何をしている人なのかが分からないほど、近所付き合いが少なっている。特に滋賀県草津市は、人口の流動が激しく、古くから住んでいる旧住民と新しく住み始めた新住民との間での交流が難しい状態にある。今年2001年4月29日から草津駅近くの空き店舗に「ひとの駅」という場を作った。草津に住んでいる人が気軽

に来てもらって、交流してもらう場になって欲しいと思っている。「ひとの駅」という名前には、おうみという切符を使うことによって、ひとびとが盛んに交流できる駅のような存在になって欲しいという願いを込めている。おうみでは、自分のできること、して欲しいことを登録してもらっている。そのリストづくりをすることで、自分たちが住んでいる草津には、こんなことができる人がいるのかということが明らかになってくるし、互いの能力と技能を生かすことができる。

第二に、持続可能な循環型の地域社会をつくることである。地域通貨は、地域が独自に発行し、物やサービスを特定の地域やグループの中で循環させることから、消費パターンが、これまでの大量消費・大量廃棄から、地域における持続可能型消費へと転換することを目指している。つまり海外から輸入された、県外から運ばれた背景の分からない商品を買うのではなく、地元のどこから来たのかが分かる顔の見える商品を買うようになってくる。この目的の実現のために、おうみでは、琵琶湖の泥土でできた「(仮称)びわこづち」の流通実験を行う。「びわこづち」は、資源循環型の持続可能な地域社会形成に向けた取り組みとして、リサイクル(再資源化)やリデュース(ごみの減量)、リユース(再利用)を促進する道具として活用する。例えば、箸や買い物袋を持参してきたり、環境に優しい商品や地域の特産物を買ったりしたら、もらえる。「びわこづち」は、非常に軽く、作る人の個性が出る焼き物であり、集めたいという衝動にかられるほど魅力的なものである。「びわこづち」をコレクションすることで、自然と環境に優しい行動が身に付くようになる効果をねらっている。最初は協力してくれるお店で少しずつやっていくが、商店街で活発に使ってもらえるようにする。また毎週金曜日は、朝から地元で取れた野菜を販売している。円でも良いが、おうみでも払えるようにもなっている。新鮮な野菜を持ってきてもらった人には、たまったおうみを、農作業の手伝った人に払うようにしてもらい、地域での農産物の循環をしていきたいと思っている。

「ひとの駅」での交流イベント

第三に、自分たちの住んでいる地域の持っている特性や人々の活力を再発見し活かしていくことで、地域経済を活性化していくことである。今まで大企業を誘致して地域経済を外発的に活性化しようとするハード面が重視されてきた。だが、どの地域に住んでいる住民の中にも潜在能力がある。それを活かしていくことで内発的にソフト面から地域経済を活性化することが求められている。おうみでは、商店街との連携を模索している。大型スーパーやコンビニであれば、物を買ってただレジでお金を支払うだけの関係に終わってしまうが、商店街は人と人とのふれあいがとても重視される。「ああ、この店いいなあ」という信頼関係が勝負である。そういう人と人との絆をつなぐ道具として、おうみは使うことができる。商店街で何らかのイベントをやるのでは来てくれるのは一回限りであり、日常的に住民の方が「自分たちの商店街」という意識を持って関わってくれるような工夫を商店街の方と一緒に考えながら、おうみがどのように活用できるかを提案している。

第四に、地域で抱えている問題を解決する手段として地域通貨を導入しようとする動きが全国で広がっており、地域通貨を活用して地域づくりをしていきたいグループとネットワークを作り、地域通貨の価値を高め定着させるための活動をしている。まず地域で抱えている問題は様々であるが、それらを解決する道具として地域通貨を導入していく上での相談に乗っている。また昨年2000年12月より、「おうみ貸し出し制度」を導入している。具体的には琵琶湖の湖南地域の

団体に対して一定量の「おうみ」を無利子・無担保で貸し出し、各団体が「おうみステーション」となって自主的に流通させるというものである。現在、大津市と守山市のグループが活用している。市内の自治会なども関心を示されていますので、これが大きな拡がりにつながっていくだろう。今後は、このように複数の自立した「おうみステーション」による多極分散型での事業展開をしていくことが基本となる。このように地域通貨おうみは、4つの目的を具体的に実現するために日々努力を重ねている。

地域通貨おうみの課題と展望

地域通貨おうみが、市民プロジェクトとして持続的に運営していくことは容易なことではない。そこで課題として3点挙げ、どう克服していくか、その展望を最後に述べておこう。

第一に、地域で循環させると言いながら、まだ登録してもらっているユーザー内でさえ、おうみはあまり循環させることが容易ではないことである。おうみの使い道を見つけることができず、おうみがたまっている状態になっている。そこで改めて、おうみの使い道をユーザーの方ともに考えていきたい。これからは定期的にユーザー意見交換会をしていく。また、おうみをより使いやすくする工夫も必要である。今は、自分たちができること、して欲しいことを登録してもらっているが、すぐには思いつかないのが現状である。そこで、あらかじめ様々なメニューを書いたカードを作り、自分がして欲しいことを何枚かとり自己紹介をする形でマッチングするやり方を検討している。さらに、おうみを持っていない人がどうやっておうみを持つかという問題もある。それについては、「つけおうみ」システムの導入を考えている。何かをしてもらったら、つけにしておいて、後で自分が何かをして、つけを返すシステムである。

第二に、草津市内の人に、まだまだ「おうみ」の認知度が低いということである。今、基本的に週3回程度開けているが、「ひとの駅」の前を通りがかっている人は、何をしているのだろうと気になっているが、なかなか中へ入ることはない。金曜日に野菜を売るようになって、足を止めてくれる人も出てきたが、もっと草津の住民の方に、おうみの存在を知ってもらう努力が必要である。そのためにはまず住民を引きつけるような魅力ある企画を日常的に「ひとの駅」でやり、あそこへ行ったら何か面白そうなことがありそうだという意識を持ってもらえる工夫をしていく。その上で情報発信である。「ひとの駅」は何をする所で、いつ何が行われているのかをまとめた情報誌を定期的に作って配ることにする。また草津には、個性あふれる様々な市民活動をしている団体が数多くある。これまでバラバラに行動してきたが、お互いの存在を知り協力できる所は協力できれば、草津のまちづくりを住民自らやっていく上で大きな力となるはずである。そのつなぎ役をおうみはやっていきたい。

第三に、動けるスタッフの不足である。今、確かにスタッフは、個性あふれるメンバーがそろっているが、そのほとんどが定職を持っているため日常的に動けるスタッフがいない。「ひとの駅」で週末、気軽に話をしてもらいながら「おうみ」を自分たちがどのように使うことができるかを話し合うサロンや、地域通貨や環境に優しい生活や草津のまちづくりについて考えるテーマを絞ってのワークショップをしており、さらに草津に立命館大学があり勉強会を開いて学生に参加を呼びかけており、おうみが面白くって魅力のあるものだと感じていただければ、このスタッフ不足は自然と解消されるだろう。そして集まってくれたスタッフが楽しみながら責任を持って運営に関わってくれるような環境を整えることも課題と言える。

このように地域通貨おうみ委員会は、徐々に地域通貨を手段として人と人との絆を結びつけ、市民が自ら草津の街を考え、話し合い、主体となって地域づくりに取り組む道具になっていくように努力している。

＜地域通貨おうみ委員会「ひとの駅」＞

電話／FAX 077－562－1153

ホームページ：http://www.kaikaku21.com/ohmi/

電子メール：ohmi@kaikaku21.com